

優秀賞

じいちゃんのような男になるぞ

千葉県
千葉県
南房総市立岩井小学校 四年

森 龍人

ぼくのじいちゃんは家族のみんなにせつかちだと思われているけれど、ぼくはじいちゃんの本当のすがたを知っている。ぼくのじいちゃんは魚屋をやっていて、魚の切身をもくもくと、すごく早く切る。あじの干物を百枚、二百枚作る時はまるでロボット、いや、それより早く包丁を動かして、あじはすばとべたんに変身する。とにかく早い。じいちゃんのはのろろしていない。それから夕ご飯がまだできていなくても、六時きっかりにすわってしまう。だからおばあちゃんに、待つてよ、せつかちねえ、と毎日怒られる。ぼくと一緒に銚子電鉄に乗りに行った時は、何時何分の電車に乗り、何分に乗りかえ、どこの駅で昼ご飯にするとか書いたメモを持っていた。時間通りじゃあないと気がすまないらしい。病院に行っても待つのがきらいで帰ってきてしまったりする。たぶんあわただしい市場ではてきぱきとしていないといけないから、ああしてせつかちでじつとしていられないのかも知れない。

ぼくはあの日、全くちがった顔のじいちゃんを知った。

じいちゃんは、ぼくが大丈夫だよと言つても毎日軽トラックでむかえに来る。だから今日は時間割り通りの四時下校だよと言つて出かけた。ぼくは体育委員なので、帰りがおそくなることを言い忘れてしまった。委員会があることをすっかり忘れていたのだ。もう五時近くなつていて、でも体育館の横をのぞくといつも通りじいちゃんが軽トラックで

待つていてくれた。ラッキー、ぼくはうれしくなつて走りながら手をふった。じいちゃんが車のドアを開けてくれて、ぼくは飛び乗った。ジュースを持ってきてくれたので飲もうとしたその時、そのペットボトルは、今から冷ぞう庫に入れるのかなあ、というぐらいにぬるかだった。

ぼくは考えた。きつとじいちゃんは四時からずつと待つていたんだ。一時間近く、ずつと、四時終わりなのに今日はおそいなあ、と待つていたんじゃないだろうか。

もう四年生だからはずかしいよ、友だちと帰れるし、学校から近いからむかえに来なくてもいいよ、そう言うつもりだったけれど、ぼくは言うのをやめた。そしてきちんと帰る時間を確認してから学校に行くことにした。

じいちゃんみたいに。

今は、よいしょよいしょと坂道を歩いて来て、信号の少し手前で待つていてくれる日もある。ぼくが下つてくると、もう汗をふきふき立っているじいちゃんが見える。

「おう、ちようど今来たところだ。お帰り。」

必ずそう言うけれど、きつと早くから待つていてくれたこと、ぼくには分かっているよ。

いつも心配してくれるじいちゃん、ありがとう。一緒に帰るの大好きだよ、今日はどんな話をしようかな。

こつこつしていて、きちんとして、約束を必ず守るじいちゃん似になりたいなあ。